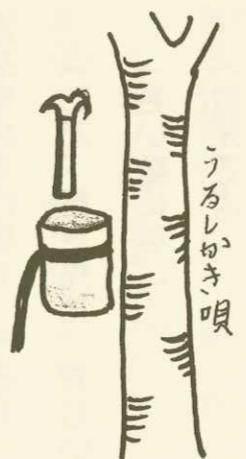


漆をとる。一人が四百本うけもつて、「日に百本漆をかけば、毎日仕事ができるあんばいや。」

「どうやって集めたの。」

「朴の木でつくったチャンポにへらですくいとつて入れる。高い所は、はしごをさしてた。盛りには一日ハ百匁もとれた。一年で一十貫ほどじつた。」

「儲かつたんか。」



「まあまあやつた。外国から安い漆が入らんようになつたころは儲かつた。損した話もきいた。帰りの宿でバクチうつて、すつからかんになつたとか、集めた漆を輸送の途中で取られてしもたとか。」

「いつ頃から始まつたの。」

「江戸時代らしい。昭和三十年ころはほんの少しになつて、かわいい子をおき、妻をもおいて、そのうち止んでしもた。」

「昔の人は苦労したんやね。」

「うるしかきさんは鳥の性を得たか朝の早いから木のそらにかわいい子をおき、行くは河和田のうるしかき、

「うるしかきさんは

「鳥の性を得たか

朝の早いから木のそらに

かわいい子をおき、

「うるしかきさんは

「鳥の性を得たか

朝の早いから木のそらに

「うるしかきさんは

「鳥の性を得たか

朝の早いから木のそらに

かわいい子をおき、

②〇余加の草分け

北中、寺中、清水町あたりをうんと昔は余加といつたそな。余加の開祖は有平といつ人だ。この人は実母に死別れて、京の都から近衛中将隆源卿と一緒にこちに来て、この地に住みついだとか。

その時、付き添つてきた人が六人あつて、それが北中の草分け六軒となつた。六軒のうち五軒はいまも続いている家で、ながづかの仁兵衛さん、上出では五兵衛さん、善右衛門さん、おつかまちでは徳右衛門どんと中出の卯右衛門どんらや。

どの家も格式たかく、庭や家構えに昔をしのばせるものがある。善右衛門どんには朝倉家から嫁に来たときの銀の跳子や足駄があつたし、卯右衛門どんには、昔殿さまからもらつた盆があつて、酒を注ぐとパツと桜の花が浮き出たもんや。

清水町では堂の下の草分けは明治時代に北海道に移住した利左衛門さんや。

寺中の草分けの新左衛門どんは、朝倉氏とは縁続きの古い家の。朝倉から嫁入りのとき、花嫁はお供に二十人をつれて、金谷坂を駕籠にのつてやってきたと。その時持つてきた道具も長いことあつたんやけど、江戸時代に火事に遭うて燃えてしもたんやと。

義景のころには、新左衛門どんの娘がお館にあがつて、義景の姫君の乳母をしてたんやと。

乗谷に敵の信長軍が近づいてきた時、義景は部下にいうた。

「この一人の娘は無事に落ちのびさせてやりたい。姉は知つてのとおり、教如上人にとつぐ約束だつた。なんとかして大阪の石山本願寺におくりとじけてほし。」との。

この時新左衛門どんの娘も女ながら命がけで大阪まで姉姫のお供をしたんやと。そして数年間はお側に仕えたんで、帰国するときに本願寺から三つの「褒美」をもらつた。親鸞上人の書かれた十字の名号と香炉と短刀や。それから近くの憶念寺に入つて、朝倉氏の菩提をとむりつた。

その縁で名号は憶念寺に寄進した。短刀はなぜか床下にうめられて時がすぎ、みつかった時にはさびてボロボロ、今は言い伝えと香炉だけが残つている。

